

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ローマ滞在日記⑥

ムツソリーニ通りができるとき

二宮 大輔

「道」という名前の道があって驚いた。

もう十年前、ローマにいた頃の話だ。大学の夏休み、学生主体の映画祭に参加するために、南イタリアはバジリカータ州の小村ノヴァ・シリを訪れた。小学校の校舎や公園は白塗りで、比較的新しくできた町という印象。その村の海岸沿いに、巨匠フェデリコ・フェリーニの映画を冠にした道路がいくつも走っていた。例えば Via la Voce della Luna (ボイス・オブ・ムーン通り)、または Via Amarcord (アマルコルド通り)といった具合だ。そのうちの一つに、彼の初期代表作からとった Via La Strada があるのを発見したのだった。日本語にすると「道通り」。そのこっけいな名前に私は思わず吹き出してしまった。



【Via delle Zoccolette 撮影:エルネスト・テデスキ】

イタリアでは、どんなに狭い小道や抜け道でも名前がついている。そして道の入口には、看板で

必ずそれが表示されている。この名前に数字をつければそれがすなわち住所となる。いたってシンプルだ。数字のほうは、建物の一階と二階の境目あたりの高さにそれぞれ表記されており、目的地を知らなくても、通り名とこの数字を頼りにたどり着くことができる仕組みになっている。ホテルに行くとき、レストランに行くとき、教会に行くとき、地図を広げて通りの名前をさがした経験のある旅行者の方は多いのではないだろうか。そんな折、意外な珍名を発見して驚いた人もまた多いはずだ。私が道通りを発見したように。

奇妙な名前でいうと、ローマの中心に Via delle Zoccolette (小さな売春婦通り) という道がある。背の高い建物に囲まれているため昼間でも日の光が届きにくい小道だ。通りの奥にはカトリック教会の古い施設がある。文献によると、この施設ができたのは 16 世紀の終わりで、聖フランチェスコ修道会系の団体が乞食たちの宿泊用にと建設したそうだ。1715 年に修道会が移転すると、当時の法王クレメンス 11 世の手により、施設は教会付属の病院に生まれ変わる。さらに通りに面した建物の一部は、女子専用の孤児院として利用されるようになった。当時のローマは教皇領で、聖職者以外の人々の暮らしは非常に貧しい。そんな庶民たちが想像したのは、孤児院を出る年齢に達した少女たちが、行くあても仕事もなく、夜の街に立っている姿だった。そこで、ユーモアと憐れみを込めて、その道を「小さな売春婦通り」と呼ぶようになった。ちなみにシルヴィオ・ベルルスコーニの浮気相手

の一人、女優サビーナ・ベーガンがこの道に住んでいたと噂されており、「まさに売春婦通りだな」という辛辣な冗談が数年前に飛び交った。

次に、ローマのショッピング街コロソ通りから一本入った筋にあった Via dei Tre Ladroni(三人の大どろぼう通り)。三人兄弟が経営するぼったくりレストランがあった通りなのだが、この名前は名誉毀損にならないのかとこちらが心配になる。19世紀末、大どろぼう通りの続きにあった別の通りと統合させられ、あえなく消滅してしまった。しかし、どろぼうにせよ、売春婦にせよ、とんでもないネーミングセンスだ。そして何より一本の道から町の歴史が垣間見えるのが面白い。

他にもこっけいな名前の道は目白押しだ。ローマのユダヤ人地区の Via delle Botteghe Oscure(暗い商店通り)では、窓のない建物内で商品の取引が行われていたという。1978年、誘拐されていた元首相アルド・モーロの遺体が発見された場所としても有名だ。こちらもローマの中心地 Via dell'Orto di Napoli(ナポリの菜園通り)にあった大学は、新しい才能を「栽培」するためにナポリ王家によって設立された。変わり種では、日本語が用いられる通りもある。トヨタ・イタリア本社の前には Via Kiicro Toyoda が広がり、火山があるという共通点で鹿児島と姉妹都市になったナポリには、Via Kagoshima が存在する。

存分に通りの名前を楽しんだところで、一つの疑問について考えてみたい。これらの名前は、いったい誰が決めているのか？想像に難くないが、市町村の行政である。ある資料によると、イタリアには8092の市町村があるとのことだ。新しい道路ができるたび、区画整備で通りを刷新するたび、これらの市町村が頭を悩まして名前を考えるわけだ。その数は膨大で、奇妙な名前が少しくらいできても当然だと思えてくる。そのようにして生み出された通り名だが、一番多いのはやはり歴史上の人物の名前だ。十九世紀のイタリア統一に大きく貢献したヴィットーリオ・エマヌエーレ二世、ガリバルディなどは、どんな町でも主要道路の冠にされる人気者だ。偉人が亡くなって数年経つと、必ず故人を偲んで道の名前にしようとする動きが出る。最近では、2012年に亡くなったノーベル賞科学者リータ・レーヴィ=モンタルチーニがそこかしこ

で通り名に選出されている。



【Ernesto Nathan】

出典:https://it.wikipedia.org/wiki/Ernesto_Nathan

モンタルチーニ級の偉人の名なら耳にしたことがあるのだが、注意して町を歩いていると、「これは誰？」という見知らぬ人物が堂々と通りの名前になっていることに気づく。私が住んでいたアパートの近所にある Via Ernesto Nathan。エルネスト・ナータンは十九世紀のユダヤ系政治家で、平民出身として初めてのローマ市長に選ばれた人物だ。または最寄り駅から北の山側に伸びていた Via Pasquale Baffi。十八世紀のアルバニア系イタリア人で、古代ギリシャの研究者。フリーメイソンにのめり込み、最後は首吊りの刑に処されている。友人が住んでいたためタクシーの運転手に何度となく口にした Via Oderisi da Gubbio は、ダンテも神曲で紹介した細密画家の名前から取っている。このように、地図をよく見てみると、先述の奇妙な名前以上に、町の道は見知らぬ先人たちがうめつくされているではないか。これを事細かに調べていけば、間違いなくイタリア歴史博士になれるだろう。

さて、ここで新たな問題が発生する。歴史上の

人物が散見される通りの一つに、ベニート・ムツリーニの名をつけてもよいかという問題だ。ムツリーニだけではない。ベッティーノ・クラクシやジュリオ・アンドレオッティなど、汚職やマフィアとの癒着で否定的なイメージがついた政治家たちを通りの名前にするのはいかがなものかという議論は幾度となく起こっている。一方で、ムツリーニをイタリア史の過ちとしてのみ捉えるのではなく、再評価すべきだという声もあるにはある。またムツリーニの右腕で黒シャツ隊の指導者だったイタロ・バルボや、ファシスト党幹部のジュゼッペ・ボッタイに捧げられた通りはすでに存在している。ムツリーニをスケープゴートに、その他多数のファシズム関連の人々が許されている構図にも見えてくる。バルボは許すがムツリーニは許せない、そういった倫理の境界線が、イタリア人の中にあるのかもしれない。それを見極めるのはなかなか難しい。



【Pasquale Baffi】

出典:<https://napolicapitaleuropea.wordpress.com>

没後 100 年は故人の名前を通りにつけることを禁じる法律をつくるべきだとエッセイに書いたのは記号学者ウンベルト・エーコだ。十四世紀に法王と対立したコーラ・ディ・リエンツォの名を冠した

通りを、現代のキリスト教徒たちは平気な顔で歩いているではないか。2045 年になれば我々の息子たちもムツリーニが誰かもよくわからなくなっているはずだと、あくまで冗談口調でエーコは主張する。また、皮肉にも高名な修道会の名を冠したミラノ大学近くの Via Chiaravalle に売春宿があり、キアラヴァッレがそのイメージ色に陥ってしまうというケースもある。こう考えていくと、道の命名はなんとも繊細な作業であり、いっそ丘通り、麦穂通り、街路樹に合わせてハンノキ通りといった一般的な名称にとどめておいたほうがいいのではないかと締めくくっている。

個人的には、これからもぜひ珍名、奇名、マニアックな人名で大いに通りが賑わうことに期待している。エーコが例に出したコーラ・ディ・リエンツォやキアラヴァッレが、記号としての道の名前とそもその由来がはっきりと分離しているところも面白い。つまり、通りの名前はあくまで住所を示すための印でしかなく、命名は繊細ではありながら、とても実務的な作業なのだ。これまで見てきたとおり、道の由来に立ち返ってみると、今まで気づかなかった意外な事実が発見できたりもするのだ。

インターネットで検索したが、現在のところムツリーニ通りは存在しないようだ。パドヴァに一つ、アドリア海側のキエーティの近くに一つ、それらしい通りがあるが、どちらも該当はしない。パドヴァのものは moscerini (ユスリカの群れ) がなまって mussolini になったとのこと。キエーティのものはインターネット地図上では見つけられるが、実際には存在しないらしい。果たしてこの先、ムツリーニ通りができる時代が来るのだろうか？それが意味するのは、イタリア人の倫理の崩壊なのか、忘却なのか、恩赦なのか。その理由に注目すると、また新たなイタリア社会の一面が見えてきそう

(元当館語学受講生)

マフィアのことば

コルレオーネ・ファミリーのメッセージ

深草 真由子

1990年代初めイタリアを震撼させたシチリアのマフィア、コーザノストラ。その頂点に長年君臨した大ボスでとりわけ凶暴なことで知られるのが、コルレオーネのト(サルヴァトーレ)・リイナである。多数の殺害事件に関わり、いくつもの終身刑宣告を受けた人物で、二十四年の逃亡生活の末1993年1月パレルモの自宅で逮捕された。



【ト・リイナ】

出典: https://en.wikipedia.org/wiki/Salvatore_Riina

先日イタリアでは、その息子サルヴォ・リイナの執筆した本が出版され、それにあわせてサルヴォのインタビューがテレビで放送された。サルヴォは父親が指名手配中に生まれたリイナ家の次男で、現在三十八歳。彼もマフィアの構成員としての前科もちで、警察の監視のもとバドヴァで暮らしている。こうした人物のインタビューを国営テレビが放映することの是非が大問題になり、それは

インタビューの内容そのものについて以上に活発に意見が交わされた。

ところがマフィアをよく知る作家ロベルト・サヴィアーノは、サルヴォのインタビューはこの二十一年でマフィアが発したメッセージの中でおそらく最も重要なものであると評価した。彼らがわざわざテレビ取材に応じる時は、必ず何か言いたいことがある。ただしそのメッセージの意味を理解するには、彼らの言葉遣いや思考の論理をよく研究して知っている必要がある。ここではサルヴォのインタビューの一部と、サヴィアーノが試みたその解説を紹介したい。

インタビュアー(以下、I):「過ちを犯した」と言うことができたなら、あなたのお父さんもいくらかの人間性を取り戻すことになるんじゃないでしょうか。

サルヴォ・リイナ(以下、SR):え、誰がです?私の父がそういうこと言うかって?ああ、それは私に尋ねてもだめですよ。

I:言った方が良く、あなたは思いますか。

SR:本人に聞くべきですね。彼がとるべき選択について、私が言うことはなにもありません。

父の非を認めるわけにはいかないから返答を避けているのだろうと筆者は思ったのだが、そう単純ではないようだ。サヴィアーノによれば、サルヴォは自分の父親について意見を言うことができない。それは父が今だにファミリーのドンだからである。ドンには絶対服従で、ドンに対して意見も何もない。服役中の父が今も権力を握っているのだ。インタビューの中でサルヴォは、リイナ家が愛情で強く結ばれた家族であったこと、父親が指名手配中でも平穏な生活が保たれたこと、ぜいたくを好まず質素な暮らしをしていたことを明かしている。大ボスの良き夫、良き父としての一面を伝え、同情を呼ぼうとでも考えているのだろうか。サヴィアーノは、ここでサヴィオはコーザノストラの伝統的な価値観を称えているのだと言う。自分の父は立派であった。正真正銘の「名誉ある男」であった。サルヴォはそう主張しているのである。

I:あなたにとってマフィアとは何ですか。

SR:考えてみたこともないし、正確な返答を持ち

合わせていません。今日マフィアはすべてであり、かつ無です。

この部分についてはサヴィアーノに言われるまでもなく、筆者も心当たりがあるし以前から案じていたことである。それは誰かが誰かのことを非難する時、「あの人はマフィア的だ」とか「マフィア的なやり口だ」とか、あまりに安易に口走る。マフィアという単語の意味を広く解釈し、乱用することに潜む危険性に気がついていない人が多い。サルヴォ・リイナは一般市民のそうした傾向を巧みに利用しているのである。殺人もドラッグ密売もマネーロンダリングも、やっている人間はいくらでもいるだろう？もはやこの世の中すべてがマフィアみたいなもんなんだから、俺たちを「マフィア」呼ばわりすることに何の意味があるのか？俺たちがマフィアなら、お前たちもマフィアじゃないか。サルヴォはそう言いたいのである。



【ファルコーネ、ボルセッリーノ両検察官】

出典: https://en.wikipedia.org/wiki/Giovanni_Falcone

サルヴォはジョヴァンニ・ファルコーネとパオロ・ボルセッリーノについてのコメントも求められている。二人はパレルモの検察官で、捜査チームの中心となって1986年の大裁判を成功させたマフィアの専門家であったが、92年にト・リイナの命令によって殺害された。それから二十年以上経った今でも、数多い犠牲者の中でもっとも名の知られた存在であり、反マフィア運動のシンボルとなっている。

I: (ファルコーネとボルセッリーノを) どう評価しますか。

SR: 言うことはありません。何を言っても、いいように利用されるでしょうから。

I: それは内容によるんじゃないですか。肯定的な評価なら...

SR: 私は死者に敬意を払っています。すべての死者に。ただそれだけです。

サルヴォがコーザノストラの内部にいる人間であることが、このあたりから次第に明らかになってくるのではないだろうか。さすがに、両検察官への憎悪をテレビカメラの前でさらけ出すことはない。しかし肯定的に評価することもやはり本意ではないし、できないのであろう。

組織を抜けて司法当局に協力するようになった者を Pentito「改心者」と呼ぶことがある。減刑なりライバルへの報復なり、私益のために協力することもあるので、必ずしも本当に改心したことを意味するわけではない。だが改心者の供述は検察にとってたいへん有益で、コーザノストラの中核の組員の大量逮捕と大裁判の成功を導いた過去がある。しかし...

SR: イタリアだけです。他の多くの民主主義国家ではこんなことは起こらない。イタリアでは、改心者は何百件もの殺人を犯したと告白して、つまり自分で自分のことを告発して—ブシェッタ氏のことだけでなく、あらゆる改心者のことを言っているのですけどね—、にもかかわらず一日も牢獄生活を送ることなく、他人を監獄に追いやりながら、自分は娑婆に戻って昔やってたことをやっているんですよ。

「イタリアだけだ。まともな国ではこんなことは起こらない！」というのは、イタリア人がイタリアを嘆く時によく言うセリフなのだが...。これがリイナの口から出てきたのを聞いて目が回るような感覚を覚えたのは、筆者だけではないだろう。ブシェッタはもともと凶悪な殺人犯であったが、ファルコーネ検察官に協力して、コレオーネ・ファミリーの秘密を暴露した改心者である。もうすでに亡くなっているが、リイナにとっては思い出だけで頭に血がのぼるような存在であろう。それまで「マフィアとは何か分らない」とさえ言っていた男が、この時

ばかりは饒舌になるのをサヴィアーノは見逃さない。改心者の供述が検察にとっていかに強力な武器となり、コーザノストラを弱体化させたのか、サヴィオはよく知っているからこそ、改心者をこうも強く攻撃するのであろう。サヴィアーノはとくに触れてはいいないが、改心者に保証される国の寛大な措置に対して国民の批判を煽りたいという意図も、サヴィオの発言に読みとることができる。

このインタビューを利用してリイナがメッセージを送っている相手は、新世代のコーザノストラと司法府だとサヴィアーノは見ている。伝統的なマフィアの道徳観を体現するコレオーネのファミリーは、規律のない墮落した現在のコーザノストラとは別物であること。重罪犯罪人の厳重な措置を定める法律41-bisの廃止を国に要求する代わりに、自分たちの行為については責任を負う用意があること。しかし決して改心するつもりはなく、よって自分たちの財産を管理している仲間の名を挙げつつもりはないこと。これが国家と交渉を進めるうえで自分たちがとろうとしている方針であり、それを新世代の連中が妨害するのを断じて許しはしないということ。以上がサヴィアーノが解読したリイナのメッセージである。

<参考情報>

・サルヴォ・リイナのインタビュー(“Porta a porta” 2016年4月6日放送)

<http://www.portaaporta.rai.it/le-interviste-di-bruno-vespa/salvo-riina/>

・ロベルト・サヴィアーノのプレゼンテーション(“Che tempo che fa” 2016年4月10日放送)

<http://www.rai.tv/dl/RaiTV/programmi/media/ContentItem-ee9db351-d6ad-49a1-9ceb-c54dc4465867.html>

(元当館スタッフ)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>

CRONACA

Iverbali

“Papà li scannò tutti” così parlava Riina jr prima di scrivere libri

Le frasi non dette in tv dal figlio del capo dei capi
Nelle intercettazioni esaltava la ferocia della cosca

“

CORLEONESI
Sono uomini che hanno fatto la storia della Sicilia... linea dura, ne pagano le conseguenze, però sono stati uomini

FERRO E FUOCO
Quando gli hanno sminchiato le coma agli stiddari ci fu una stagione di vampe, 65 morti in una

IL PERSONAGGIO
GLI ASCOLTI
Fra il 2000 e il 2002 la squadra mobile di Palermo intercetta a casa e in auto Salvo Riina mentre organizza una sua cosca che pilota appalti a Palermo

LA CONDANNA
Il figlio di Riina è stato arrestato nel giugno 2002, è rimasto in carcere fino al 2008 condannato come “capo e promotore” di un’associazione mafiosa

LA SORVEGLIANZA SPECIALE
A febbraio, il pm di Palermo Sergio Demontis ha ribadito “la pericolosità sociale” di Riina junior. Un boss di Corleone gli inviava soldi a Padova

Salvo Palazzolo

Io vengo dalla scuola di Corleone», dice nella premessa. «Oh, mio padre di Corleone è, mia madre di Corleone, che scuola posso avere?». E inizia il suo lungo racconto: «Di uomini che hanno fatto la storia della Sicilia... linea dura, ne pagano le conseguenze, però sono stati uomini, alla fine. E io... sulla mia pelle brucia ancora di più». Eccole, le vere parole di Giuseppe Salvatore Riina detto Salvo, il figlio del capo di Cosa nostra. Le parole che si è ben guardato dal pronunciare a Porta a Porta durante l'intervista con Bruno Vespa, le parole che non ha scritto nel suo libro. Le vere parole di Salvo Riina sono in un altro libro, conservato negli archivi polverosi del palazzo di giustizia di Palermo. Si trova in cima a uno scaffale, «Riina - 23» è scritto sulla co-

la Repubblica VENERDI 15 APRILE 2016 21

PER SAPERNE DI PIÙ
www.polizidistato.it
www.palermo.repubblica.it

A "PORTA A PORTA"
Bruno Vespa durante l'intervista a Salvo Riina nella puntata di "Porta a Porta" del 6 aprile scorso

Riesi a Palma di Monteciaro, un racconto terribile. «Ci fu un'estate di vampe» — spiega il giovane boss con grande naturalezza — Ferro e fuoco. Qualche sessantacinque morti ci furono qua, solo in un'estate». E gli con il suo racconto sugli stiddari: «Che razza — dice — qua ci vuole il revolver sempre messo dietro, ma non il revolver quello normale, qua ci vuole il 357, che con ogni revolverata ci 'a scappari u cranio». Totò Riina ordinò un vero e proprio sterminio. Anche questo racconta il figlio: «Ci fu un'estate che le revolverate... non si sapeva più chi le doveva ammazzare prima le persone». E ancora: «Minchia, appena ne sono morti due di quello, partiamo, tre morti di quell'altro... Appena gli hanno ammazzato a quelli tre, gliene andavano ad ammazzare altri cinque. Puro a Marsala gli ha dato vastunate... era una fazione di boss perdenti... si erano messi in testa che loro dovevano rivoltare il mondo».

BUSINESS E STRAGI

【2016年4月15日のラ・レブブリカ紙。警察に傍受されていたサルヴォの会話が暴露された】